

山形大学附属博物館報25

THE MUSEUM OF YAMAGATA UNIVERSITY

1999. 3

目 次

骨は語る	伊藤健雄 (1)
大見安田家文書について	伊藤清郎 (3)
資料紹介	(4)
平成10年度事業報告	(6)

骨は語る

館長 伊藤 健 雄

自然史系の博物館には、動物の剥製標本、乾燥標本、液浸標本、複製標本など、タイプの異なるさまざまな標本が展示してあって、それぞれ訪れる観客の多様な興味や関心に対応している。どんな標本にも、見る人を引き付ける魅力はあるものであるが、中でも観客の人気を集めている展示物は、動物の「骨格」標本である。

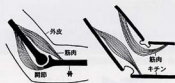
動物の骨を直接観察する機会は、食卓に上る魚や鳥のそれを除けば、私たちの日常生活ではそう多くない。動物のからだの各部分の骨は、生きていたときの姿からは想像もできないような、奇妙な形をしているものが多くある。普段ほとんど見られないものを見たいという好奇心、珍しいものに出会った驚き、生と死の大きなギャップに対する畏敬の念、そしてちょっぴり感じる薄気味悪さなど、複雑な感情が交差しつつ観客は骨に魅了されるのである。

一見奇妙に見える骨の形も、それぞれの動物の生活にとって最も適した合理的な形をとっていることが分ると、その進化の妙に感心させられてしまう。また、骨には、魚類から哺乳類に至る動物進化の道筋を表す情報が明確に刻み込まれていて、見る人に彼らの生命の長い営みを語りかけてくるのである。骨が語る動物の生活と進化の証しに耳を傾けてみよう。

(1) 脊椎動物と無脊椎動物

全動物種の数パーセントにも満たない脊椎動物は、からだの中軸に軟骨性や骨性の脊柱（背骨）

をもち、内部にさまざまな形をした骨格が備わっている「内骨格」の動物である。これに対して、全く骨の無い動物や、表面を被う堅い甲羅や貝殻で柔らかいからだを包んでいる「外骨格」の動物は、総括して無脊椎動物と呼ばれ、動物界では圧倒的な多数派である。からだの中に脊柱が形成されるかどうかは、動物の進化の段階を示す重要な決め手である。



内骨格と外骨格

(2) 軟骨と硬骨

軟骨はイカの仲間軟甲でも見られるが、よく発達しているのは脊椎動物の骨格においてである。骨ができる最初の時期には、骨の大部分は軟骨で構成されているが、発生が進むにつれて骨組織で置き換わる。脊椎動物の仲間でも、原始的なヤツメウナギやサメ・エイなどの骨格は全て軟骨性であるのに対して、タイやスズキのような硬骨魚類では骨化が高度に進んでいる。哺乳類の骨格では、軟骨は骨の一部や関節の摩擦面などにあって、弾力性に富んでいてからだの滑らかな動きに役立っている。

(3) 頭骨と歯

脊椎動物の頭骨は、内骨格と外骨格とが複雑に組合わさった部分で、脳を覆っている脳蓋頭蓋、鼻

に並ぶ2本の趾骨にはそれぞれ緒が装着されている。四肢の指の減少と中足骨の伸長は、歩く動物からより速く走る動物への特殊化であった。

欧米、中規模以上の自然史博物館や大学博物館には、「骨部展」とでも言うべき展示室があり、あらゆる動物の骨格標本が、手を延ばせば届く距離に並べてある。観客は目を輝かせて眺めて楽しみ、さらに撫でてその感触を楽しむことができる。また、魚類から哺乳類、そしてヒトまでの進化の過程で、骨格を構成する骨の一つ一つがどのように変化したかを見比べることができる。残念なことに日本では、骨部展のある博物館は五指にも満たない。特に大学博物館は、欧米のそれに比べて、あまりの貧弱さに目を覆いたくなる現状である。骨は、「標本」の重要性に対する認識と研究・教育の在り方の必要性を語っているように思えてならない。(教育学部 教授)

大見安田家文書について

伊藤清郎

1.

附属博物館の1998年度の特別展は、「古文書でたどる武士の世界 鎌倉そして江戸—米沢市大見安田家文書—」と題して、1998年11月16日から27日まで9日間開催された。古文書の分野では、検注名寄帳と離縁状の2つが目玉であったが、離縁状(三下り半)についてはすでに紹介されているので『山形大学附属博物館報』24)、ここでは前者を中心に少し触れてみたい。



特別展

2.

札幌市在住の安田慶一氏から古文書が当館に寄託されたのは、1995(平成7)年5月のことであった。文書数は603点にのぼり、近世・近代に関するものがそのほとんどである。安田家は米沢藩の上級家臣として藩の要職を勤めた。そのため米沢藩の藩主関係・政務や法令に関する文書が多く見られる。また上杉鷹山が家督を継ぐ前後の日記、文久3(1863)年米沢藩が京都警衛を命じられて上洛したときの日記などもある。さらに給人知行関係、借金のトラブル・離縁状・武芸の免許・連歌・家系に関するものがまざまざと存在する。米沢藩政史研究にとっても、また武家の社会生活史にとっても貴重な史料といえよう。



安田家菩提寺

3.

もちろん中世に関するものも、兵法書などをふくめて数点ある。そのなかでも嘉禎2(1327)年8月24日付、検注名寄帳は出色の文書である。越後国白河荘安田条における領主支配のあり方を示す史料である。

ところで鎌倉期、大見氏は越後国白河荘の地頭であった。白河荘の範囲は、現在の新潟県北部、北蒲原郡安田町・水原町・笹神村・豊栄市の一部にあたる。同荘は長承3(1134)年に立荘化し、本家職は殿下渡領つまり摂国家領であり、領家職も九条家とその出身者によって相伝された。立荘時の現地管理者は、越後北部に大きな勢力を有していた城氏と考えられる。源平の争乱の中で城氏の勢力が衰退する一方、功により伊豆国の御家人大見氏が同荘の地頭に補任される。大見氏は伊豆国田方郡大見郷に拠り、宇佐氏と同族で、平姓である。地頭大見氏は荘園内を分割領有して、山

浦・水原・安田の三氏に分かれていく。総領は山浦氏である。その後、山浦氏には守護上杉氏が入嗣し、山浦上杉氏は次第に一番に勢力を広げやがて山浦地方は府内（上杉氏の拠点春日山城がある地域をこう称する）に次ぐ第二の政治的中心となっていく。戦国期には揚北（阿賀野川より北の地域をこう称する）の有力国人衆の一員として水原・安田各氏も活躍するのであるが、やがて上杉氏の家臣となり、幾多の戦功をあげることとなる。

この検注名寄帳は、料紙（緒紙、一紙は、たて30.2cm、よこ40.0cm）を25紙張重ねたもので、紙継目裏花押がある。白河荘安田系における領主支配のあり方を示す史料であることは先に指摘した（釈文は省略する）。名寄帳は、①名分（前欠がある）と、②給分に大別される。①は領主名であろう。各名は、まず納税者（一分）を記し、一筆毎の田数（蒔高表示）と地名・作人名とを記して、それをまとめた田数（蒔高表示）と、さらに上田・中田・下田というように地権を区分して各々年貢高（貫高表示）を記し、最後に高代も含めた全年貢高（貫高表示）を記す。そして末尾にその名全体の田数・代銭数をまとめて名を把握するという記載の仕方でもとめられている。②給分の方は、記載の仕方は①と同じであるが、政所・若藤（党）原・御中間・下部や、それに御手作・殿の呼称や法名をもち一族と思われる者、このような各分ら構成されている。

注目される点をいくつか列記すると、まず蒔高表示であること。年貢は代銭納となっていて、納期は春であること。安田氏は総領を中心に、一族・若党・中間・下部という家臣団編成になっていること。番匠・曲師など手工業者・職人らを権力編成のなかに組み込んでいること。などがあげられよう。また末尾に「見（検）注使」として連署している弥七家信・左近入道は、安田氏の家臣であり、しかもこの検注名寄帳の紙継目裏花押は大見賢家のもと考えられるところから、この検注名寄帳は鎌倉期に地頭安田氏によって作成されたものであろう。したがって、この文書は地頭の在地支配を示すものとして注目されることになろう。これまで知られていた数少ない史料に、新たに加えられた貴重な史料であることが理解されたと思う。

山形大学附属図書館には、国指定の重要文化財である「中条家文書」が所蔵されているが、今回寄託された「大見安田家文書」は、この「中条家文書」に匹敵するほどの文書であるといえよう。大切に整理・保存していかねばならないことは、いうまでもないであろう。



検注名寄帳

最後に、附属博物館に寄託された大見安田家文書に関する関係文献を以下に掲載しておく。『古文書近世史料目録 米沢市安田家文書』第18号（山形大学附属博物館、1996年）、阿部洋輔「越佐関係中世史料（二）」（『新潟県立文書館 研究紀要』第3号、1996年）高木 侃「附属博物館の三くだり半—利用者の立場から—」（『山形大学附属博物館報』第24号、1998年）、伊藤清郎「越後国白河荘と大見安田氏—新史料をめぐって—」（『国史談話会雑誌』第37号、1997年）などがある。参照していただければ幸いである。

（教育学部 助教授）
附属博物館運営委員

資料紹介

箕輪出土の蕨手刀

寒河江市醍醐地区箕輪の出土と伝えられている蕨手刀が山形大学附属博物館に所蔵されています。蕨手刀とは奈良時代から平安時代の初頭にかけて盛行した鉄製の刀です。柄頭の形状が早蕨の巻いた曲線に似ていることから、この名があります。



錆の浸蝕が甚だしいため、原姿の正確な寸法はわからないのですが、現在の全長は50cmです。把手の長さは11.8cmで、刃部の幅は4.2cmです。一般に蕨手刀は全長は50～60cm前後、身と共作りの柄の長さは、平均12cm程ですから、平均的な大きさと言えるでしょう。刀身と柄が一体につくりだされ、刀身は幅広く短く、あまり反りがありません。早蕨の頭のようにになっている柄頭に孔を穿っているのは手貫の緒を通したものでしょう。片手で握る武器であったようです。棒や桜の樹皮や糸を直接柄に巻いたあとに喰出鐔（はみだしつば）鉦（ははぎ）をつけ茎をそのまま柄とする特徴を持っていました。つまり、柄木を取り付けずに使用していたということです。鞘は木製のほか皮鞘もあり双脚か單脚の足金物がついていました。

箕輪の蕨手刀は出土状況など詳しいことはわかっていません。蕨手刀が古墳から出土したという証拠もありません。箕輪古墳群は、大化二年（646）の薄葬合のあとに造営された新しい古墳であったと推定されているに過ぎません。箕輪には箕輪古墳群があったといわれていますが、いまは一基も残っていないからです。蕨手刀は従来、柄に比して身の短く幅広いものが古く、身が柄に比して細長いものが新しいといわれていますが、箕輪出土の蕨手刀は柄長：全長＝1：3.2となっており、この説に当てはめれば、より新しい時代のもたと推測されます。

正倉院御物刀剣の中にもただ一口ですが、伝世品としての蕨手刀があります。柄を藤の繁巻にし、平柄に堅半な青銅金具をもちい総体に黒漆をかけた黒作模刀（くろつくりのたち）です。造込は鋒両刃切刃造で地は板目に直刃をわたしています。頑丈ではあっても、いささかの飾り気も豪華さも

ない、全くの武用専一の太刀といえるでしょう。蕨手刀全般からみると、その中期の作で、地刃、及び拵金具の洗練度から察するに中央の工人の手になるものと思われます。数少ない伝世品（他に、群馬県吾妻町の大宮巖鼓神社に一口ある）ですので、この刀の存在は蕨手刀の年代を知る上においても大切な例示になっています。

蕨手刀は全国的には約194例ほど発見されていますが、その分布は、中部関東・東北・及び北海道の東日本に多く、西日本の出土例はほとんどありません。東日本でも、東北と北海道に集中しています。小形の古墳や横穴などから頭葬品として出土する例が多く、岩手県湯田口熊常古墳では「和同開珎」と共判していたという例もあります。山形県では18振が発見されており、山形市の谷柏や漆山、そして、東根市の野田などの出土例が知られています。山形県で発見された蕨手刀の形状は、元幅を広く先を細めた長三角形でやや小振な、初中期的な作が多くなっています。

蕨手刀の発生については、頭椎太刀（かぶつちのたち）からの変化説や外来説、刀子を起源とする説などがありますがよくわかっていません。蕨手刀を特徴づける柄頭の早蕨状の窟は、刀を降り下ろした際に脱落を防止するための措置でした。そこに孔を穿って懸緒を着けるようになったのも、大陸外来の刀の拵に真似たとはいえ同じ効果をねらったものでしょう。柄に比して刀身が長大になるとバランスをとるよう喰出鐔が作られるようになりました。実用的な戦闘武器としてより使いやすいうに発達していったようです。また、平安時代の御府の官人や公家の侍として警備に当たった武士が用いた毛抜形太刀（けぬきがたち）はこの刀が発達したものとされています。毛抜形太刀は蕨手刀の貴族化ともいえるべきでしょうか。

東日本とくに東北を中心に発見されていること、奈良時代から平安時代にかけて一時的に盛行したこと、そして、実用的で頑丈な武器であることから、蕨手刀は蝦夷討伐に従軍した兵士の携帯したものとする説もあります。当時、この役に従った兵士は東国に滞在の人々でした。その一部は遠く陸奥の奥地に進んで戦死したのもあり、あるいは随所に永住した一族もあり、または、あてなく故郷に凱旋したものもあったでしょう。それらの

記念に埋葬された品が、時代を経て偶然私たちの前に発見されたとしたら……。蕨手刀を前に古代の東北に思いを馳せてみてはいかがでしょうか。
(附属博物館 長瀬 香)

平成10年度事業報告

平成10年度に本館で実施した博物館実習の参加人数は次のとおり。

	1 回目 7.21～24	2 回目 8.25～28	3 回目 9.21～25	合計
人文学部	12	9	9	30
理学部	6	6	2	14
教育学部	8	17	16	41
合計	26	32	27	85

昨年度から博物館実習の単位数が変更となり、2年目をむかえた今年度でしたが、附属博物館学芸研究員・運営委員ほか学内教育のご協力により、無事全日程を終了することができた。

公開講座は、「山形たんけん隊 PART 2」と題し、平成11年10月24日・31日・11月7日の各土曜日、計3回、一般市民を対象に開講し、山形市西部の長谷堂城や東部の千歳山などを訪ね、山形新発見・再発見を楽しんでいただくことができた。
講師及び講義科目は右上的とおり。

特別展は、平成10年11月16日から27日までの9日間、「古文書でたどる武士の世界 鎌倉そして江戸(米沢市大見安田家文書)」と題して開催された。期間中の入場者の中には、鎌倉時代に安田家が地頭職をつとめた所縁の地である新潟県北蒲原安田町から、教育委員会教育長をはじめとする歴史愛好家の団体の見学などもあり、学内外からの見学者に好評を博した。

講師及び講義科目

第1回 10月24日 180分
山形たんけん隊 PART 2 歴史編
城と祈り ―長谷堂城― (長谷堂城周辺)
山形大学助教授 伊藤清郎
* 北村優季

第2回 10月31日 180分
山形たんけん隊 PART 2 文学編
(万松寺―千歳山公園―丸川)
山形大学教授 菊地仁

第3回 11月7日 180分
山形たんけん隊 PART 2 地学編
(村木沢―青沢―長谷堂)
山形大学教授 大場 與志男
* 阿子島 功

平成9年度見学者総数

一般成人	個人	332人
	団体	234
大学生	個人	1,432
	団体	134
児童・生徒	個人	9
	団体	172
合計	個人	1,773
	団体	540
	総数	2,312

山形大学附属博物館 625 1999.3発行
編集兼発行人 山形大学附属博物館
☎990-8560 山形市小白川町一丁目4-12
(TEL) 023 (628) 4500 (直通)
<http://133.24.40.3/library/hakubutakan.html>